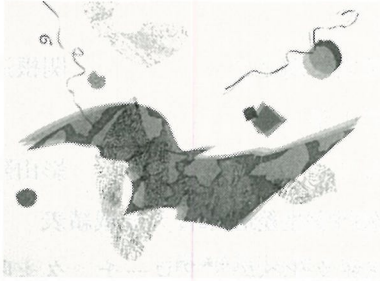


富山医科薬科大学

# 医学部同窓会報

1993. 第2号



富山医科薬科大学

# 医学部同窓会会報

1993・第2号

5. Intermezzo 広田弘毅

8. 時代と共に 山崎高應

31. 奢れる生活からの軌道修正 上村 清

10. 看護学科について

13. 第16回医薬大祭記念講演会

日本の医療の軌道修正の提唱 日野原重明

講演会開催にあたって 高田昌彦

38. 短歌俳句づくりの効用と上達法の1つ 大星光史

「ちんぐるま」第1集より 新聞入選作品集

41. 俳壇・歌壇

## 追悼

34. 久世照五先生を偲んで 畠山 登

36. 追悼文—西山敬人君を偲んで— 鵜飼桃代

## あの人この人

42. 人事消息

43. 新任教授紹介 第2内科 井上 博先生

50. 卒後十年生 暑気払い 宮林千春

52. 短 信—第11回総会出欠連絡ハガキから—

## 学園だより

- 44. 自由な言論の確立に向けて 関根道和
- 45. 執行委員会この1年
- 46. 1年を振り返って 影山隆司
- 47. 第44回西日本医科学生総合体育大会戦績表
- 48. 文化部会だより 伝統文化へのアプローチ 久永明人
- 49. この1年

## 会員連絡

- 1. 会費納入のお願い
- 7. 医学会入会のお勧め
- 9. 十周年記念誌購読について
  
- 53. お詫びと訂正
  
- 54. 平成4年度(第11回)総会議事録 沢 丞
- 56. より円滑な同窓会の運営のために 池田成子
- 57. 会計報告
- 58. 職掌分担
- 60. 名簿資料収集責任者一覧
- 68. 会則

## 募集

- 33. 会名募集
- 51. 原稿募集
  
- 67. 協賛社一覧
  
- 72. 編集後記

—表紙—

## 「翔」

木版型押し 91×62cm

作：金子千恵子

立軌会会員

日本版画協会会員

協力：大沢野クリニック

半田豊和（昭和57年卒業）

高野 隆（昭和58年卒業）

綴じ込みハガキ（御意見・御感想用）

# Intermezzo

広 田 弘 毅 (昭和59年卒業)

Calgary大学医学部の図書館は、Health Sciences Centreの二階にあるが、一階のMallと吹き抜けてつながっており、閉鎖空間にならないように工夫されている。その一角にある新着雑誌のコーナーで、論文を物色していた私の目にいきなり飛び込んできたのは、最新号のAnesthesia and Analgesiaに掲載された故・久世照五教授の乳酸代謝に関する論文だった。その瞬間「久世先生の声を聞くことはもうできないのだ」という哀惜の念とともに、ようやく和らぎかけてきた悲しみが再びよみがえり、私は雑誌を手にしたまま、十数年に及ぶ久世先生の思い出を回顧した。

私は、初めて久世先生にお目にかかった時のことを今でも覚えている。その頃私は本学医学部の学生で、室内合奏団（現・管弦楽団）に属していたが、ろくに講義にも出ず、チェロばかり弾いている不良学生だった。ある土曜日の昼下がり、部室で練習していると、廊下から快活な笑い声が響き、白衣の良く似合う先生が入ってきた。眼鏡の奥の優しい笑みが印象的だった。それが久世先生だった。先生は、我々不良学生の面倒を見るために合奏団の顧問を買って出て下さったのだった。

顧問としての久世先生は、単に「顧問」という名を冠するには余りあった。強化練習の際には必ず顔を出され、気の利いた菓子等を差し入れて下さり、時には御自宅に私達を招かれ、豪華な夕食を振る舞って下さった。また久世先生御自身もフルート奏者であり、御自分のフルートを持参され、合奏に参加なさることもあった。それまでパンと水だけで活動していたような私達にとって、それは夢のようなできごとだった。

久世先生は演奏会の企画・運営等にも適切な助言・協力をして下さり、社会的に無知な私達は何度助けられたかわからない。多忙なスケジュールの合間を縫って、私達とともに後援会の資金繰りに足を運んで下さったこともあった。今から思えば、私は知らず知らずのうちに、久世先生から社会の仕組みを学んでいたのだった。

医学部を卒業した私が、麻酔科学を専攻しようと決心した理由の一つに、学生時代に久世先生の人柄に触れ、このような先生を師として働きたい、という気持ちがあったことは否めない。しかしながら、私が久世先生の本当の偉大さを知ったのは麻酔科学教室に入局した後だった。

大学病院の医師は、臨床・研究・教育の3つの能力が要求されるが、久世先生はその3つをバランスをよくこなすことのできる数少ない医師の中の一人だった。久世先生は顔面痙攣の権威で、先生の治療を求め全国から

患者が集まってきた。最近ではボツリヌス毒を応用した神経ブロック療法を導入し、学会でも注目を集めていた。顔面痙攣は原因不明の難病でその治療は長期に渡るため、患者も医師も忍耐を要する。中には長期の治療のうちに疑心暗鬼となり、憤りを示す患者もいる。そのような患者を前にしても久世先生は決して動じることなく、時には慰め、時には叱咤激励し、時にはユーモアで患者を和ませながら巧みに治療を続けた。そういった久世先生の言動の一つ一つが、私にとって臨床医学を学ぶ上で、最上の生きた教科書となった。

久世先生の業績の中で、私が最も深く感銘し影響を受けたのは「乳酸代謝に関する研究」である。これは臨床研究と動物実験を巧みに組み合わせた研究で、臨床医ならば誰一人として避けて通ることのできない輸液の問題に、久世先生は真っ向から挑戦されたのだった。毎年、新入医局員は久世先生に付いて臨床研究の助手をすることになっており、私達は麻酔研修をしながら「医学研究とは何たるか」を目の当たりに学ぶことができた。私も、久世先生の偉大な業績に触発された者の一人であり、更なる研究の発展を模索してカルガリー大学へ留学した。久世先生が逝かれたのはその矢先だった。

私はAnesthesia and Analgesiaの久世先生の論文を読み終えた。私をLife scienceの神秘へと誘なった、その研究の続編を見ることはもう無い。私にとって久世先生は、医師としての先生であったのみならず、人生の師であり目標だった。私の人生的一幕は久世先生との出会いで始まり、そして今、先生との別れとともに静かに幕を閉じたのだ。

Intermezzoは重く悲しく、いつ果てるとも知れず続いている。しかし亡き師の恩に報いるためには、いつかきっと、自分の手で次の幕を開けなければならないと思った。

ひろた・こうき 富山医科薬科大学麻酔科講師  
(現カルガリー大学Medical Physiology)

